

控訴人意見陳述

札幌高等裁判所第 3 民事部御中

2008 年 5 月 22 日

控訴人：猫塚 義夫

私は、猫塚義夫と申します、職業は医師です。

控訴人の 1 人として、いまだ戦闘状態の続くイラクでアメリカ軍を始め多国籍軍とその戦略物資の輸送に従事している自衛隊に一刻も早くイラクから撤退してもらいたく、意見陳述を行います。

私たちは、戦争や戦乱が起きれば、必ず、生命と生活の安全を確保するためにその国内外に数多くの難民が発生することを経験してきました。

イラク戦争では、すでに 400 万人の難民が発生し、200 万人の国内難民のほか、国外難民として 150～200 万人のイラク人が隣国シリア・ヨルダンで戦火を逃れています。

私は、本年 3 月 7 日から 14 日にかけて、ヨルダンの首都アンマンとシリアの首都ダマスカスを訪れ、戦火のイラクから逃れてきたいわゆる「イラク難民」の方々の実態を見てきました。

本日私は、そうした経験に基づいて、イラク難民問題を根本的に解決するためにはイラク戦争を早期に、かつ、平和的に終結させる事、そして、アメリカのイラク戦争への協力を目的にまだ続いている航空自衛隊のイラク派兵を即刻中止することを訴えるものであります。

まず、最も深刻なのは、イラク戦争の中でアメリカ軍により使用された劣化ウランによる生体被害の深刻さです。

その多くは、劣化ウラン弾による「放射能汚染・被害」を受けた両親のもとに出生してきた子供たちに多発しています。

アリンちゃんと家族（アンマン）

私たちの宿泊先を訪ねてきたアリンちゃん2才は、ヒルシュシュプルング氏病という生まれつき大腸の働きのない子供でした。放置しておくと腸閉塞により生命に関わる先天性奇形の疾患です。彼女の母親、ヘレンさんは2003年当時バクダッドで米軍の劣化ウラン弾による空爆を経験していました。

アリンちゃん2才 ヒルシュシュプルング病

本年2月に国連とイタリアNGOからの資金援助で人工肛門設造術を受けました。しかし、現在、その後の治療費のめどが立たず両親も途方にくれている状態でした。

フセム君2才（アンマン：ルズミラ病院）

次は、アンマンのルズミラ病院（Luzmila Hospital）で診せて頂いた、先天性鎖肛をもって生まれてきたフセム君2才です。

バクダッドのアルホルア地方でエンジニアをしていた父親のラシールさんの話によると、イラク国内での治療が危険となり、ヨルダンへ逃げてきているのです。

ラシールさんは、知り合いにも病気の人々が多く、今はヨルダンに来るイラク人を支援しているとのことでした。

先天性鎖肛とは、生まれながらにして肛門がなく排泄ができません。放置すると腸閉塞により生命が危篤の状態となるため、1年間に4回の手術により人工肛門の装着を余儀なくされていました。

私たちは、未だ危険なイラクに止まらざるを得ない人々が大勢いることに心を痛めました。

フセム君2才 先天性鎖肛
フセイン君と家族（アンマン）

また、アンマンで自宅訪問した生後10ヶ月のフセイン君は、お母様がイラク南部、バスラの出身です。彼女は、今までに1980年、1990年、2003年と3度の戦乱を経験していました。

フセイン君 10ヶ月 先天性尿道奇形

フセイン君は、先天的尿道奇形の状態で数度の手術でも完治することができず、尿失禁の状態が続いているのです。

こうした劣化ウランによる放射能被害と思われる先天異常児の出生は、以前から指摘されているところです。

戦乱のイラクから診断治療のために出国することさえできず、イラク国内で絶命している子供たちを想像すると、その原因となっている「イラク戦争」の早期終結を心から願わざるをえませんでした。

UNHCR 難民登録センター（ダマスカス）

さて、何とか、生命の安全のために戦乱のイラクから逃れてきた人々の多くが、まず行なわなければならないのが「難民登録」と「難民認定」です。

ダマスカスにある国連難民高等弁務官事務所（UNHCR： The Office of the United Nations High Commissioner for Refugees）が運営する難民登録センターを訪問しました。

そこでは、毎日多くの難民が押しかけていますが、1日の「難民登録」は500人程度です。また、今までに150万人が「難民登録」され、「難民認定」の申請をしましたが、実際に「難民認定」された難民は、16万5000人でしかありません。

「難民認定」ブース（登録センター内）

登録センター内には、30個の「難民認定ブース」があります。しかし、スタッフの体制も不十分なため、「難民登録」を受け付けられてから「難民認定」の審査が開始されるまで約半年間も待たされるとのことでした。

その間にビザの期限が切れると「不法滞在」となるため、ここに集まってくるイラク難民は、当面一日も早く「難民認定」されることを切実に願っています。

バーベルさん35才、銃弾創による脊髄損傷

バーベルさんは、2006年5月、シーア派民兵から腰椎部に銃弾を撃ち込まれ、脊髄損傷となった方です。2007年5月にダマスカスに逃れてきたあとも車いすを余儀なくされていました。

戦乱の中で、かろうじて命が救われたものの、これからの半生を障害を持った体で生活せざるを得ない状態に追い込まれているのです。

しかも、明日を保障されない難民生活との二重苦を背負った状態はイラク戦争が続く限り解決されることはありません。

さて、イラクにおける人的被害には、直接の外傷と劣化ウラン弾による二次的被害が指摘されています。劣化ウランによる放射能の被害は、被爆した親のもとに生まれてくる新生児の先天奇形として発生しました。

しかし、ここに示すファイサルさん25才は、それまで全く正常な身体で生活を送っていた大学生でした。

ファイサルさん25才、進行性神経麻痺の青年

2003年 3月、イラクのサマッラで、11時間にわたるアメリカ軍の空爆を受けた2ヶ月後、四肢麻痺を中心とした精神・機能の低下が発症し、現在では、立位・歩行も困難になってしまいました。

ファイサルさんの母親によると、サマッラの「ガスヌイル」地区では、彼のような人々は、18人もいる、とのことでした。

この青年に出会って私は、劣化ウラン弾以外にも、何らかの『心身破壊兵器』の存在があるのではと思いました。

私たちは、彼に日本から持参した車いすを寄贈し、彼のこれからの日常生活動作の拡大に少しでも手助けになることをこころから願ってきました。

教会での昼食の炊き出し

また、私は、難民生活の実態を見るため、ダマスカス市内、ジャラナマ地区のキリスト教イブラヒム教会での「昼食の炊き出し」を見学いたしました。

そこでは、困窮する生活の中で家族の昼食を確保するため、時間が近づくと教会の中に列を組んで並びます。

昼食の受け取り

「炊き出しの順番」を待っている時の表情は、穏やかですが、ちょうどピラフに似た食事が各自の容器に入れられる時の表情は、真剣そのものでした。

私は、難民として生きてゆく人々の生活に対する覚悟と厳しさをか
いま見る思いがしました。

私たちは、ここでも生後9ヶ月のシャーレス君母娘に日本から持参し
た車いすを寄贈することができました。母親のマークーンさん32才も
民兵に脅迫されて1年半前にバクダッドから逃れてきた難民の1人だっ
たのです。

サイダザイナブ地区（通称：リトルバクダッド）

もう一つ、ダマスカス市内には、通称「リトルバクダッド」と言われ
るサイダザイナブ地区がありました難民への“車いす”の寄贈 派の聖
地でもあり、およそ40万人の難民が身を寄せながら暮らしています。

本年、3月18日毎日新聞・東京版の朝刊では、そこに住むバクダ
ッド近郊出身のサーリムさんの難民生活の様子を報じていました。

彼は、昨年11月、治安が改善されたと聞き、家族全員でイラクに
戻りました。しかし、「電気は来ない。街は崩壊」の現実を目の当たり
にし、再びシリアへ戻りました。失業率が4割を越すイラクで暮らすの
は困難だと判断したそうです。

記事は、続きます・・・・・・・・。

「車や家具を売り2万ドルが手元にあった。だから最初の暮らし向きは
そんなには悪くはなかった」とサーリムさんは振り返る。だがそんな生
活は長くは続かない。宗派对立が激化し難民の数が増えたからだ。不動

産価格は上昇し、何度も住み替えを迫られた結果、現在は8畳ほどの居間と台所だけのアパートに妻と子ども6人、弟の計9人で暮らす。

近くの通りで、携帯電話の中古アクセサリを売り生計をたてる。1日の売上高は多い日で500シリアポンド（約1000円）。「朝、目が覚めたら1シリアポンドもない日がある。この情けなさが分かるか」。サーリムさんのこうした訴えは、過酷な難民生活を伺わせるものです。

<資料>に添付した北海道新聞、3月18日朝刊、国際面に掲載された、イラク開戦5年を特集した「傷跡」という特集記事があります。

そこでは、19才の女性が「身売り」までしてイラクに残る家族の生活を支えなければならないこと。また、1日3ドルの稼ぎで生活をつないでいることなどが紹介されています。

こうして、イラク戦争開戦から5年をすぎてもなお、生命の安全のために隣国ヨルダン・シリアに逃れてきた難民の方たちの生活は日に日にその困難さが増加している実状を見ることが出来ました。

以上述べてきたように、2003年以来イラク戦争により発生したイラク難民の過酷な現実を彼らの実際の生活を通して見てくると、私は一日も早い難民問題の解決を願わざるを得ませんでした。

そして、そのためには、難民発生悲惨な難民生活の根本（北海道新聞2008年3月18日朝刊）早期に、かつ平和的に終結させることが何より

イラクに平和をもたらすためには、現地でも多くの難民の方々が口をそろえて主張するように、まず第一に、イラクからアメリカが撤退すること。

アメリカの軍事支配が、実はイラク戦争を泥沼化させ、一方で、テロリスト集団には、争乱状態を作り出す絶好の口実を与えていることは、もはや周知の事実です。

にも関わらず、開戦当初から日本政府はアメリカが開始したイラク戦争を無条件に支持し、イラクに陸上自衛隊と航空自衛隊を派遣してきました。

そして陸上自衛隊が撤収した後も航空自衛隊をイラクに派遣し続けイラク戦争遂行のためのアメリカ軍やその戦闘物資の輸送業務を受け持っています。

こうして、日本の自衛隊のイラク派遣は、第一に、専守防衛を基調とした自衛隊法や、海外での軍事・武力活動を禁じた日本国憲法に違反していること。

第二に、アメリカによるイラク戦争の遂行を容易にし、一方、イラク戦争の終結や難民問題の解決を困難なものにしているのは明らかです。

私は、この平和憲法下で、あろうことか再び侵略する側の国民となって、イラクの人々とその将来に大変な被害を与えることに、やりようのない怒りと苦しみを感じています。本当につらい思いです。

従って、私は、イラク戦争を早期に終結させ、イラクに平和を実現し、難民として苦しんでいる人々が一日も早く、祖国に帰国できるようにするために、イラクへの自衛隊派遣を差し止める司法の判断を心から願うものであります。

以上で、私の意見陳述を終わります。